

ネパール大地震 救援募金のお願い

現地時間2015年4月25日11時56分にネパールの首都カトマンズ北西77km付近、ガンダキ県ゴルカ郡サウラパニの深さ15kmを震源として発生した地震で、地震の規模はMw7.8と推定。首都カトマンズ盆地も激震に襲われました。エベレストではプモリから発生した雪崩によりBCにいた登山者18人が死亡。「エベレスト史上最悪の惨事」となりました。また、ランタンリルンから崩落した氷河による雪崩、土石流でランタン村がほぼ壊滅、歴史的な惨事となっています。5月9日現在、地震による死者7912人・負傷者17811人、被災者は人口の30%にあたる800万人の大災害となりました。

日本山岳会は1956年のマナスル初登頂をはじめ、ネパールとはともに深く歴史を刻んできた会です。ネパール国民と被災された多くの皆様に、心からお見舞いを申し上げます。

皆様方におかれましても、ネパールの友人の安否を気にされている会員も多いと拝察いたします。

本会を含む日本の主要山岳団体(公社・日本山岳協会、公社・日本山岳ガイド協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、日本ヒマラヤ協会)と緊急協議を行ない、ネパールに縁のある方々や団体の義援金を「ネパール大地震救援募金」として、心をひとつにして募集し、ご寄付いただいた全額をネパールの被災者救援および復興に役立てる手段を講じることで合意いたしました。すでに各国の国際救援活動や民間ボランティア等による救援活動が行なわれていますが、当会では特にダメージの大きかったランタン谷をはじめクーンブ、ロールワリン、マナスル山群などの山岳地帯への救援・復興支援を中心に用途を考えております。

現在、現地在住の会員や山岳関係者からの情報を収集して、効果的で不正のない団体への援助を考えておりますので、どうぞ協力くださいますようお願い申し上げます。

(公益社団法人 日本山岳会)

専用の郵便振替口座、「日本山岳会ネパール大地震救援募金」を設けました。

口座記号番号=00130-5-486550、加入者名=日本山岳会ネパール大地震救援募金、通信欄=会員番号、住所、氏名、電話番号を必ずご記入ください。

募金は1口2千円です。2口(4千円)以上は税額控除の対象となり、税額控除の証明書が交付されます。

ATMやネットバンキング利用で税額控除を希望される場合は別途募金申込書(当会ホームページよりダウンロード)を事務局あてFAX、E-Mailまたは郵送にてご送付ください。郵便為替払込票を使用しての振込の場合は不要です。なお、振込手数料は振込人負担をお願いいたします。

他行からの振込は、ゆうちょ銀行、〇一九(ゼロイチキュウ)店、当座、0486550



2015年(平成27年)

5月号(No. 840)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

ネパール大地震 救援募金のお願い	1
平成26年御嶽山噴火と活火山登山	2
気象から見た日本の山	5
山の日のメモ	5
第31回全国支部懇談会	
小島烏水ゆかりの地で開催	6
ガンガプルナ北稜登山隊2015報告	8
活動報告	10
YOUTH CLUB	
図書紹介	11
図書受入報告	13
会務報告	14
創立一〇周年記念事業	
日本三百名山登頂シリーズ②	15
ルーム日誌	16
新入会員	17
会員異動	17
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

平成26年御嶽山噴火と活火山登山

東京工業大学火山流体研究センター 寺田 暁彦

1・はじめに

御嶽山で平成26年9月27日に発生した噴火は、紅葉色めく名峰を楽しんでいた一般登山者に、甚大な被害を与えました。今回の噴火で犠牲になった方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。また、いまも山上に取り残されている6名の方々が、一日も早く発見されることを願ってやみません。

その日は秋晴れで絶好の登山日和でした。私は草津白根山で不調だった観測装置の点検を終えて、職場である草津白根火山観測所で昼食をとっていました。御嶽山の異変に気づいたのは、噴火開始から約30分が経過した12時20分ごろ、インターネットがぎっぴりかけです。被災した登山者や御嶽山周辺にいた一般の方々が、TwitterやYouTubeなどの投稿サイトに、噴煙画像や動画を次々とアップロードしていました。これら一次情報に触れたことで、大変深刻な事態が進行中であることを知りました。私が御嶽山周辺に到着したのは、噴火開始から7時間が経過した19

時ごろでした。調査を始めて間もなく、今回の異常が、火山学的には小さな噴火であったことを認識できました。翌日のお昼ごろと記憶していますが、調査中、ラジオから聞こえてくる安否不明者の数が20名、30名と増えてゆきました。発生した現象は、活火山ではありふれた小規模な水蒸気噴火に過ぎないのに、私がかつて経験したことのない大きな火山災害になってしまったことに、様々な思いが交錯したことをよく覚えています。



図1. 噴火翌日の御嶽山。晴天ではあるが風速10 m/sに達する強風の中、雄大な噴煙に比較すれば豆粒のような大きさのヘリコプターが救出活動を実施していた。平成26年9月28日、山頂から東北東へ約10km離れた木曾町・開田高原付近から撮影

2・噴火の概要

昭和54年(1979年)10月28日、御嶽山はそれまでの長い休止期か

ら目覚め、小規模な噴火を起こしました。このときの噴火の規模(火山灰噴出量は、平成26年噴火の同程度)2倍と考えられています。このとき山頂周辺に約40名の登山者がいましたが、噴火が穏やかに始まったこともあり、人的被害は負傷者1名ですみました。その後、平成3年(1991年)や平成19年(2007年)にも、地獄谷火口周辺に薄く火山灰が散らばる程度のごく小さな噴火が発生しています。特に平成19年は、マグマの動きに關係すると考えられる超低周波地震と呼ばれる特殊な振動も観測されました。このように近年、御嶽山とは明白でした。

平成26年9月27日は、紅葉シ

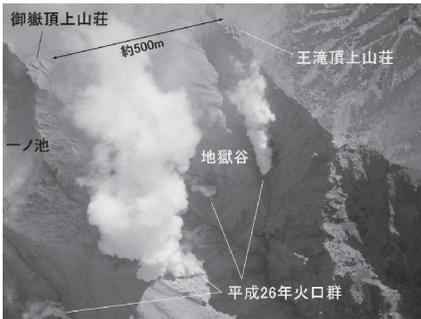


図2. 御嶽火山平成26年火山群と山荘との位置関係。平成26年10月26日に東京工業大学が軽飛行機を用いて撮影した垂直写真

ズンの週末、しかも穏やか天気ともあって、多くの登山者が山頂を目指していました。噴火が開始した11時52分ごろ、山頂付近には少なくとも約250人の登山客が滞在していたようです(長野県警調べ)。噴火の強度はすぐにクライマックスを迎えて、間もなく多数の噴石が降下を開始しました。地獄谷に開いた主火口から頂上の山荘群まで、わずか500mの距離でした(図2)。多数の無防備な登山客のすぐ近くで、突然の爆発が起きた時点で、本災害の趨勢は決まったと言えます。

このような重大な事態に至った要因は複雑ですが、火山現象の学術的理解が進んでいないという一



図3. 王滝村・田の原天然公園を離陸する無人ヘリコプター。御嶽山総合観測班による火山ガス調査。平成26年11月21日撮影

点については、確かに事実です。そこで大学教員を中心とした研究グループが組織され、文部科学省の支援を受けながら今回の噴火現象の理学的研究を進めています(図3)。気象庁も、平成26年度補正予算に基づいて観測機能を強化するとともに、火山に関する情報提供のあり方を見直すなどの改善に取り組んでいます。

3・噴火警戒レベル

平成26年噴火は、気象庁が運用する噴火警戒レベルが1(平常)とされた中で発生しました。気象庁がレベルを3に引き上げたのは、噴火開始から44分が経過した12時36分でした。このときに至っては、すでに多くの登山者が被災している状況でした。

そもそも噴火警戒レベルとはなんでしょうか。これは平成19年に導入されたばかりの、まだ数年足らずの運用実績しかない新しい仕組みです。火山活動の状況を5段階に区分して発表し、「警戒が必要範囲」を明示するとともに、「登山者や住民が」とるべき防災対応を示します。登山者の視点からすると、レベル3以上は入山禁止、レベル2は火口周辺への立入禁止、

レベル1は平常とされています(注・平成27年5月18日から、気象庁は『平常』の表現をやめることにした)。活火山であっても、噴火警戒レベルが導入されていない火山もあります。例えば、蔵王火山、鳥海火山、弥陀ヶ原火山(立山・室堂付近)など(平成27年5月現在)。詳しくは気象庁ホームページをご覧ください。

噴火警戒レベルは、複雑で分かりにくい火山現象を1から5までの数字で表現します。この仕組みは一見すると分かりやすいですが、火山の現状をこの数字だけで表現することには無理があります。

さらに大事なことは、火山現象に関する学術的な理解が進んでいないことが挙げられます。火山で異常が検知されたとして、それが噴火に至るかについての判断は、想像力と経験に基づきます。もちろん、最新知見と精密データを総合してレベル判断が下されるよう懸命な努力が続けられています。しかし、噴火警戒レベルは、科学的に保証されたモデルに基づいて運用されているものではありません。これが天気予報との大きな違いです。御嶽山でも、平成26年噴火の約

2週間前から地震活動が活発化しており、気象庁からは解説情報が3回も発表されていきました。しかし、レベルは1(平常)のまま、その日を迎えました。

4・活火山を登るために

*下調べ

災害に直面したとき、「正常性バイアス」と呼ばれる心理状態に陥ることがあります。これは、望ましくない現実を前にして「まさかそんな酷いことが起きるはずがない」「とりあえず自分は大丈夫だ」などと認知が歪んでしまう現象で、日常生活を含めて、様々な場面で誰にでも起こります。その結果、切迫した状況を前にしても適切な行動がとれず、避難行動の遅れにつながります。適切な行動を取るためには、火山で何が起きるのか、どのような危険が存在するのかを、事前に具体的に知っておくことが重要です。

雪崩や落石などの危険を事前に検討することと同様に、火口がどこにあるのか、過去にどのような噴火や災害が起きてきたのかを知っておくべきです。また、出発前に天気予報や天気図を確認することと同様に、最近の活動状況を調

べるべきです。レベル1(平常)であっても、精密観測によって、わずかな異常が捉えられていることは珍しくありません。

これらの情報は、気象庁の「火山登山者向けの情報提供ページ」というホームページで、24時間、どなたでも確認できます。スマートフォンにはうまく対応していませんが(平成27年5月現在)、なんとか読むことはできます。それらを読解するために難しい知識は不要です。検索サイトYahoo!やGoogle等のホームページから、「気象庁」「登山者」のキーワードで検索すれば、数秒もかからず簡単にたどり着けます。

また、一般報道を参考にするのも良いでしょう。例えば、NHKは災害対策基本法に基づく指定公共機関であり、火山も含めて防災情報を迅速に報道する責務を負っています。しかし、小さな異常については、地元ローカルニュースや地元新聞に掲載される程度です。これらのローカルニュースに、他県から訪れる登山者が触れることは少ないことでしょう。自らインターネット等で記事を検索する必要があります。

以上のようにして、活火山登山についてリスクアセスメント(危険評価)を行いません。リスクの存在を認識した場合、そのリスクを許容して登山するか、ルート変更等の対応の対策を取った上で登山するか、登山をやめるかの判断(リスクマネジメント、危機管理)を行います。リスクマネジメントは、その登山に対する魅力や、対策にかかると同様に、噴火に遭遇するリスクがゼロになることは、決してありません。

その名のとおり、活火山は活きています。落石や雪崩に巻き込まれるリスクを完全になくせないことと同様に、噴火に遭遇するリスクがゼロになることは、決してありません。

*噴火対応

桜島火山などのごく一部の例外を除いて、ふつう、噴火は滅多に起きません。噴火に遭遇した経験のない火山学者も珍しくないほどです。このように、登山者が噴火に遭遇する可能性は、実際のとこる高くはありません。以下は、御嶽噴火災害の教訓を残す意味をこめて記述します。

登山者が噴火に対して適切な対応を取ることは、そう簡単ではあ

りません。噴火といっても様々なタイプがあるからです。細かい火山灰を静かに噴き上げる場合もあれば、轟音とともに巨岩を投出するタイプ、あるいは火砕流(高温火山灰と火山ガスの混合物が谷筋を高速で流れ下る)が発生することもあります。時間とともに、これらの噴火タイプや影響の及ぶ範囲が変わることも珍しくありません。

以下は一般論として記述します。立ち上る噴煙を確認したら、直ちに全力で火口から離れます。その際、噴煙から石が降ってくることを想定します。火山灰や石が降る領域は、上空の風向きに強く影響されます。したがって、まず退避するべき方向として、噴煙の流向(多くの場合、東から直角の方向を考えます。なお、低い所を狙って流れてくる火砕流を避けるため、谷や沢筋を避けるべきです)。

降灰に巻き込まれた場合には、昼間であつても極度に視界が悪化し、相当な息苦しさを感じる場合があります。御嶽山では、泥雨が激しく打ち付けてきたほか、ドライヤーを押し付けられたような熱さを感じた方もいたそうです。さらに、高濃度火山ガスを吸引する

ことによる鼻・口・喉の不快感や目の痛み、火山雷の轟音など、まさに五感にわたり強いストレスがかかります。このような緊迫した状況で平常心を保つことは難しく、道迷いや滑落に至る心配もあります。もちろん噴石が降下してくる可能性もあります。しかし、少し風向きが変わっただけで、状況が大きく改善する可能性もあります。落下物を避けられる場所が見つければ、その場に留まる方が得策な場合もあるでしょう。

5・終わりに

平成27年4月26日から箱根火山の活動が活発化し、ゴールデンウィークの最中である5月6日早朝、気象庁は噴火警戒レベルを2に引き上げました。これを受けて、神奈川県箱根町は有名観光地である大涌谷周辺への立入を規制しています(平成27年5月11日現在)。噴火を予測しても噴火しなければ(空振り)、観光業への負の影響が残ります。逆に異常を見逃して突然噴火すれば、大きな人的被害を出す可能性もあります。不確実な未来予測の中で、関係者のご苦労は察するに余りあります。

平成26年は、御嶽火山に先立つ

8月、鹿児島県の口永良部島火山が34年ぶりに噴火し、同11月には熊本県の阿蘇火山が約20年ぶりのマグマ噴火を開始しました。そのほか、山形・宮城県境の蔵王火山や、福島県の吾妻火山が活発化しているというニュースが流れています。これらのことから、近年、わが国の火山活動が一斉に活発化しているという印象を持たれている方も多いかと思えます。

しかし、その見立てが妥当かどうかは難しいところです。そもそも、噴火警戒レベルの導入から、まだ8年目です。気象庁による火山監視体制は年々向上しており、以前は検知できなかったわずかな異常さえも捉えることが可能になってきました。さらに、御嶽火山災害を経験し、より安全側へという意識が働いているのかも知れません。

したがって、いま、活火山登山を特に忌避する必要はないと思います。むしろ、わが国には世界の活火山の7%が集中し、その活火山がいま、まさに活動していること、そして、このような自然を前にして、我々など小さな存在に過ぎないという事実を感じる、良い機会なのかも知れません。

シリーズ〈山を考える〉① 気象から見た日本の山

猪熊隆之

日本列島は山だらけの国土である。国土の約73%を山地や丘陵地が占め、北米やロシアなどに見られる大平原はない。山がちな国土のため、地形が複雑でいくつもの盆地や平野があり、山を挟んだ両側で天気が大きく違うこともある。川端康成の名作『雪国』の冒頭に出てくる「国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。」という文は、日本の気象の特性を端的に言い表したものだろう。

また、海に囲まれているため、海と山との距離が非常に近く、海からの湿った空気が山にぶつかって上昇するため、日本の山岳は天気変化が激しく、雨が多い。

温帯低気圧が発達しながら通過していく地理的な位置にあたるため、時として山岳では大荒れの天気となり、気象遭難がたびたび起きている。

日本の山岳の最大の特徴として、世界的に見ても1、2位を争う積雪量、降雪量の多さがある。冬季

はシベリア高気圧からの季節風が日本海を渡る間に変質し、日本海上で発生した積雲や積乱雲が脊梁山脈で上昇させられてさらに発達するため、北陸地方から北の日本海側における降雪量、積雪量は世界でも類を見ない多さで、新潟県上越市高田では標高50mもない平野部にもかかわらず、377cmという記録を持ち、新潟県十日町市の旧松之山町や旧入広瀬村などは、温暖化が進んだ現在でも最深積雪が400cmを超える年も珍しくない。また、山岳ではさらに積雪量が増え、伊吹山(岐阜・滋賀県)の1182cmをはじめ(伊吹山では温暖化が進んだ現在、積雪量が激減している)、立山連峰の室堂では最深積雪が例年8〜9mに達している。

日本の山岳は、ヨーロッパ・アルプスやカナディアン・ロッキーに比べて緯度が低く、夏季の間、太平洋高気圧に覆われて気温が上昇することや、梅雨前線、秋雨前線、

台風などにより多量の雨が降る。特に、富士山と大雪山で3ヶ月、アルプスでは4ヶ月も雪が降らない期間があり、この間に一気に融雪が進むことから、冬季に多量の降雪があるにもかかわらず、氷河は立山・剣連峰で小規模なものが近年、発見されているに過ぎない。ただし、地形的な影響で積雪が吹き溜まる場所では雪渓や雪田という形で盛夏でも残雪が残り、お花畑と雪渓が織りなす風景美は、中部山岳や北日本の山岳の最大の魅力となっており、降雪がない期間が長いことから、雪氷の歩行技術に長けていない一般の登山者が、稜線漫歩を楽しむのが日本の山の良さでもある。

また、多量の降雪や、海からの湿った空気が、ブナや杉などの原生林と多様な動植物を育てている。しかし、こうした美しい景観が大きな危機に曝されているのも事実。「山の日」制定をきっかけに私たちは、これらの課題と向き合っていかなければならないだろう。

「山の日」メモ

4月17日、「山の日」事業委員会の今年度第1回会合が開かれた。委員会は2ヶ月に1回のペースで開かれ、担当の山賀理事も出席して意見を言う。年度の初会合とあって議題も多く、2時間があっという間に過ぎた▼3月の全国「山の日」フォーラムの検討から始まった。会場を訪れたのは2日間で1万8千人とされた。数としてはまずまずだが登山団体としてのJACの存在感が不足している、一発イベントが終わったところでの先「山の日」とどう取り組むか長期的な展望が見えていない、などの指摘があった▼群馬岳連がJACや労山、みなかみ町と組んで8月に関東ブロックとして谷川岳でのイベント(登山中心)を企画している。同じく8月には大分・九重町で「山の日」制定全国集会在プレ・イベントとして予定されている。これらにどう対応するか。何を企画するにしても32支部の皆さんとの連携が問われている。ブロックごとのつながりもあろう。これからは本番——。知恵を出し合いましょう。

Round-Table Conference

第31回全国支部懇談会

小島烏水ゆかりの地で開催

第31回全国支部懇談会が4月11日(土)、香川県高松市の石清尾山中腹にある喜代美山荘「花樹海」で開かれた。森武昭第24代会長、節田重節副会長を迎えたのははじめ、全国20支部から計150人余りの会員らが出席して盛大に行なわれた。

午前中、石清尾山の峰山公園で開催された第3回小島烏水祭の後、正午に花樹海で受付を開始。午後1時半、四国支部の宮本良之会員が開会を告げ、主催者を代表して四国支部の尾野益大支部長が「お国自慢に徹したプログラムを用意。日本山岳会を創立した小島烏水や家族が高松と江戸でどういった暮らしぶりだったかについてお伝えしたい。写真とシンポジウムによる四国の山の魅力も紹介したい」と挨拶した。

講演会のタイトルは「小島烏水と江戸常泉院」。真言宗常泉院の住職で大正大学名誉教授の平井宥慶さんが、スライドで常泉院周辺の

四国支部 尾野益大

絵地図を映しながら地理を分かりやすく解説。

この後、常泉院が水戸家の江戸屋敷の近くに存在していたこと、小島家が仕えた高松藩松平家は、水戸黄門さんの兄が養子として入っていた関係で高松松平家と水戸家が親類にあたること、小島家が江戸時代から常泉院の檀家であり、その後も関わりが深かったことなどを紹介。

平井さんは小島家の暮らしぶりなどにも触れ「小島家が貧窮していた時期があったといわれるが、世間でいえば中位にあるような余裕があった。貧窮を極めていたら一代の文化を築くような文化人まで起き上がることは不可能だった」と強調した。

続くスライド鑑賞とシンポジウムのテーマは「四国の山はなぜ美しい」。

スライド鑑賞は写真家・白川義員さん(四国支部特別顧問)に師事し四国で活躍している愛媛県の写



シンポジウム「四国の山はなぜ美しい」

真家・石川道夫さんが撮った傑作50枚を上映。

長年、愛媛県内の高体連指導で活躍し、30年以上にわたってエアリアマップ「石鎚、四国剣山」の執筆をしている四国支部の清家一明会員が、石鎚山系や剣山周辺をはじめとする四国全域の山々の個性や自分が親しんで味わった思い出、絶滅の危機に瀕している希少な草花の価値、赤石山系にある「別子銅山」など歴史遺産の重要性などを丁寧かつ情感たっぷりに説明。参加者にしつかりと四国の山をPRした。

円滑な上映作業に際して、四国

支部と日ごろ協力して活動をしているNPO法人剣山クラブの桑原豊秀理事長の支援を得た。

シンポジウムは四国支部の会員4人が登壇。

パネラーを南極越冬隊経験があり、三嶺のシカの食害防止活動に努めている高知大教授の石川愼吾さん、東北大山岳時代にカラコルムのシンギカンリ(7202m)に初登頂をした今井順一さん、石鎚山北壁500回以上の登攀のほか、黒部の奥鐘山西壁や丸山東壁などに記録を残すクライマー・前田成範さん、国体の選手・監督経験、南・北アメリカ、アフリカ、ヨーロッパなどの最高峰登頂者の宮崎良平さん。進行役を尾野支部長が務めた。

各会員は、自分の経験をもとに四国の山の美しいと思う点を挙げ、「地質や植生によって環境が異なり、独特の景観を見せる」「人が滅多に行かない岩壁には非常に珍しい花が見られ、ホッとする場面があった」「静けさが四国の山の良いところ」「巨樹が多く、歴史が深い名所がある」などと話した。

全体的に時間が足りず、まとまりのない内容になった感があつた

が、尾野支部長は「四国の山だけが美しいのではなく、四国の山も美しい。日本の山は美しいということでしょう」との結論に導き、マイクを置いた。

終了後、「四国の山の良さを初めて知ることができた」という感想などを直接、寄せてこられた四国外の会員もいた。

また、この日刊行した沢登りの記録誌『四国沢紀行―源流で見た夢43本の写文集』(B5判、92頁)が出席者一人一人に配られた。この本は四国支部のユースクラブのメンバーが中心になって実施した四国の沢登りのデータ、写真を掲載した内容で、本部ユースクラブ委員会から補助金を受けて完成した。約2時間の休憩と入浴を挟んだ後、夕食懇親会があり、四国支部監事の山平靖さんが開会挨拶。小島烏水祭の企画段階から多大な貢献をして下さっている香川県議会議員の鎌田守恭さん、開催地を代表して高松市長の大西秀人さん、森武昭第24代会長、尾上昇第23代会長、平井宥慶常泉院住職、関西支部長の重廣恒夫さんを来賓に迎え、代表者からひと言ずつ挨拶を賜って盛大な拍手が会場に響いた。

烏水のお孫様として小島誠さん(四国支部)、南英敏さん(同)、相良泰子さん(同)、相良嘉美さん、江面孝子さん、緒方泰さんも出席した。

乾杯では、支部事業委員会の宮崎絃一委員長が「数年前から打診していた四国での支部懇が実現した」と話し、全員で発声した後、参加者は歓談と食事を楽しんだ。ステージの横には各支部からご祝儀としていただいた地酒がずらりと並び、次々と栓が開いていた。

アトラクションは、小島烏水祭と全国支部懇談会を祝福する歌として、徳島県内を中心に活躍する



懇親会では、阿波踊りの輪が広がった

ソプラノ国見仁美さん、ピアノ栗田美佐さんが披露。「サウンド・オブ・ミュージック」「エーデルワイス」「すべての山に登れ」「雪山讃歌」「坊がつる賛歌」「山小舎の灯」「岬めぐり」「青い山脈」「翼をください」「オペラ・ジャンニ スキツキ」より私のお父さん」「フニクリフリクラ」を高らかに格調高く歌い上げ、一緒に口ずさむ会員、笑顔で手拍子をつける会員が見られた。

全国の支部の出し物では、関西支部の重廣恒夫支部長による80周年記念式典などの案内、埼玉支部の大久保春美支部長の挨拶などのほか、四国支部ユースクラブのメンバー4人が紹介され、声援を受けた。

宴会が終盤近くになったところ、鐘の音とぞめき(浮かれ騒ぐこと。阿波踊りのメロディー)のリズムに乗って会場に入ってきたのは、この行事のため徳島から訪れた阿波踊り連「水玉連」のメンバー約30人。男、女、子どもも踊り子と三味線、笛、太鼓の鳴り物に分かれ、工夫を凝らした演舞をステージで繰り広げた。

最後は出席者全員が立ち上がり、

踊りの指導を受けて、会場狭しと踊りの輪をつくった。

次回開催地の出席者を代表して、越後支部の遠藤家之進正和さんが「今日は本当にお世話になり、楽しかったです。来年は越後支部の番です。ぜひ、新潟へお越しください」とPR。四国支部顧問の国沢鎮雄さんの閉会挨拶で中締めとなった。

12日(日)は2班に分かれて、香川県の「飯野山(422m)登山、善通寺参拝、讃岐うどん店巡り」、徳島・高知県境の「三嶺(1894m)登山」を実施。

飯野山は「讃岐富士」といわれるほど端正な形をした名山、善通寺は真言宗の開祖・弘法大師空海が誕生した館跡に立つ寺院、讃岐うどんは香川県が誇る名物。三嶺は石鎚や剣山に劣らない四国屈指の名峰。コマツツジとクマサザに覆われた景観と山頂からの大展望が魅力。

各斑の参加者は、まずまずの天気に恵まれ、けがもなく、下山することができた。なお、三嶺登山の後には四国支部が管理する菅生口ツジで火を囲み、歓談をして盛り上がった。

日本山岳会創立110周年記念事業

ガンガプルナ北稜登山隊2015報告書

大堀泰祐

ネパール・アンナプルナ山群の一角に人知れずそびえる山、ガンガプルナがある。アンナプルナI峰からグレイシャードーム、ガンガプルナと7000mの稜線が続き、果ては40km先のアンナプルナII峰、ラムジュン・ヒマールまで続いている。

8000mの陰に隠れ注目されない山の代表と言えるのが、このガンガプルナだ。トレッカーは皆アンナプルナと名の付く山か、麓の町マナンの写真しか撮らない。そんな中で自分とパートナーの飯田は、ひたすらガンガプルナを眺めていた。

最初にあるのは黒々とした壁。所々白い雪のバンドが走っており、上部に一際大きな雪のバンドが見える。壁を抜けるといったん平らになるが、また黒い壁が見える。それを越えると頂上まで急な登りはないが、明らかにリッジが細くなっている。1時間後には雲の中に入ってしまうかもしれない、飯田とともに同じような写真を何枚も

何枚も撮った。

ルートのには行けそうだが、問題は高度と天気だと思った。ここからすべての判断はできないが、諦める要素も見当たらない。こうして自分と飯田の登山が始まった。

社会人になり確実に山を登る仲間が少なくなってきた。厳しい登攀や長期山行は減り、重い荷物も持たない。山岳部として活動していたときのがむしやらかな姿勢、腕が上がらなくなるような荷物も黙々と背負う根性、部屋に染み付いた汗の臭いも忘れつつあるが、山に行きたい気持ちはいささかも衰えなかった。

7000mに挑む前にチュルル・ウエスト(6429m)で高所順化するために、ガンガプルナを通り過ぎてトロン・パスの方に歩を進めていった。しかし、例年以上の積雪にBC建設まで予定より2日遅れてしまい、隊員の順化にも時間がかかり、最終的には好天周期を逃し、暴風雪に巻き込まれてしまった。一晩で30cm以上の積

雪があり、なおも降り続ける雪に雪崩の危険も高まったことからBC撤収を決定した。

しかし、チュルル・ウエストBCの高度は4900m、7000mに挑むには不安な順応高度であった。自分と飯田はせめてギユンダン峰(5312m)を経由してチュルル・ウエストの麓の町レダーに下りた。

再びガンガプルナの麓マナンの町で態勢を整えて、BC(4000m)を建設した。元々のBC予定地の高度は5000〜5500mだったが、積雪が多くポーターが入れなかったため、大幅に高度が下がってしまった。そこで、ABC



ABCへ向かう。正面はガンガプルナ北壁

(4700m)を作り、そこに登山用食料やガスを置き、サーダーとBCキーパーなどが滞在するBCにはキッチンテントのみがある状態とした。

ABCからはガンガプルナの北壁と同時に、日本で調べても判然としていなかったアプローチの全容がよく見えた。おそらくいままで見た人間も少なく、写真に収めようとも思わなかったであろう部分だ。アプローチはいったん谷底に下りて登り返すという、非常に面倒なものだった。それでも、最悪の場合は氷河帯の横断になる可能性もあると思っていたので、いくらかは歩きやすそうであった。

そうして始まったアタックの困難は予想を遥かに超えたものとなった。しかも、日本からの天気予報だと好天は長く続かないという最終的に3月末の1回目のアタックは悪天候とフリークライミングのような壁に阻まれ、敗退という結果になった。

いったんマナンの町に下りて、心身ともに回復させ、1回目のアタックで学んだことを反映し、装備を削った。土気は全く衰えていなかった。



脆い岩場にルートを拓いていく

2回目のアタックは4月5日から始まった。ここからはテントで書いた記録も交えていく。
4月5日

ABC…4700mから、いったん400mほど下り谷底に下りる。その後再び4900mまで登り返す。途中、60〜70度の傾斜のラッセルがあり苦勞する。
4月6日

C1…4900mから5500mへ。ひたすら脛まで埋まる最中雪のラッセル。その後ルンゼに入り、雪の積もったテラスに幕営。前半は特筆することがないほど、単調な歩きのみ。後半のルンゼでは2度、小規模な雪崩に遭うも、流

されるほどのものではなかった。
4月7日

C2…5500mからいよいよ登攀開始。脆い岩に雪が積もっているため、除雪をし、そのあと浮石を落としてから登るので、1ピッチ2〜3時間近くかかってしまう。最も難しいピッチは80度近く、雪が付いていなかったが、フリークライミングのようだった。体的に5・8か5・9だった。

この日は4ピッチ延ばして5660mまでしか上がれなかったが、それでも難所は越えたと幾分か気が楽になった。
4月8日

C3…5660m。出だしから傾斜の強いラッセル。その後登攀とまでは言わないが、緩い岩の壁を昨日と同じように除雪と浮石の処理でスピードの出ない登攀が続く。5800m付近で陽が沈み、ヘッドランプでの行動となってしまふ。その上、プロテクションの取れない壁が出てきてしまい、ここでも時間をロスしてしまふ。5950mの幕営予定地に近づくとき急傾斜のリッジとなり、1人分の幅のリッジにテントを立てるために整地に非常に時間がかかった。

4月9日

前日の就寝時間が午前3時だったので、寝不足で2人ともまったく動けず、レストとした。
4月10日

テント内での士気は比較的高かったが、外に出た瞬間に不安に襲われた。このまま登り続けて下りられるのか、と脳裏をよぎった。すでに残りの食料と今後の天気のことを考えて山頂は諦めていた。それでも、壁だけでも完登しようとモチベーションは高かった。

しかし、2日後の悪天候の予報、いまいる極細のリッジ、そして登ってきた支点の取れない脆い壁。これらの難所を、北壁を完登した後の6100m地点より、悪天候から逃げるように下りなければならぬ。それならば、下りるのは



北壁最終到達地点の大堀(左)と飯田

晴天のいまのうちだと判断するの
に時間はかからなかった。

下降に使った支点はボラード2回、ピナクル5回、残置したナッツ1回だ。そのどれもが不確実であった。本当に埋まっているのか、ただ単にたまたま凍りついていた支点もあつたに違いない。それでも自分たちは、この幕営地でさえ安心できない壁から逃げるようにC1まで下降した。
4月11日

C1からは、また谷底に下りてから登り返さなければいけない。疲れてはいなかったが、速度は遅かった。BCに帰るとサーダーのハスタとBCキーパーの森が温かく迎えてくれた。もう命の危険がないという安堵と、敵わなかった壁に心が締め付けられた。

今回の遠征の目的は、「7455mのガンガプルナを2人でアルパインクライミングする」というものだった。結果は5950mまでしか達せず、標高だけ見れば惨敗である。しかし、得たものは計り知れない。

2年後、3年後を見据え、国内で力をつけ再び遠征を行ないたい。



日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

YOUTH CLUB 佐渡島・大佐渡山脈縦走

YOUTH CLUBワンダーフォーゲル部では、新人がリーダーとなって月例山行を企画していきます。1月は熱海の玄岳、2月は奥日光の光徳小屋泊で切込湖・刈込湖、3月は千葉の鋸山に行ってきました(4月は雨天中止)。

5月はゴールデンウィークの2〜4日、節田副会長の佐渡の生家に宿泊させていただき、島北部の大佐渡山脈を縦走しました。集合場所は佐渡の玄関口、両津港。カ



金北山を正面に尾根道をたどる

ーフェリーで向かう途中、イルカの歓迎を受け、山登りの格好でカモメと戯れる稀有な幕開けです。

佐渡島は、1172mの金北山を主峰とする北部の大佐渡山脈、南部の小佐渡山脈、それらに挟まれた米どころの国仲平野で構成されます。海岸線は280・4km、面積は東京23区並みの大きな島。地図で見えていた以上に広く、移動にはレンタカーが必須です。

今回の縦走コースは、大佐渡のアオネバ登山口から、花の百名山に名を連ねるドンデン山(北部の高原の総称を通り、佐渡最高峰の金北山(日本二百名山)を登った後、防衛庁管理道路へ抜ける最もポピュラーなルートです。標準コースタイム6時間とありましたが、植物観察や休憩を含めて合計9時間の行程となりました。

前半は、雪解けとともに咲く高山植物の群生(登山道沿いの斜面



大輪のシラネアオイ

を覆うオオイワカガミ、路傍に延々咲き続ける大輪のシラネアオイと無数のカタクリ、可憐なキクザイチゲとオオミスミソウに感嘆しながら、沢沿いを登ります。足場は比較的乾燥しており楽でした。

コース中盤は、日本海と小佐渡の海岸線を眺望する尾根道で、小さな登り下りを繰り返して進みます。ガレ場に芝生場、桜やタムシバの咲く樹林帯と実に変化に富み飽きません。稜線の北側はシベリアおろしの季節風が吹きつけるためか、樹木が生えていないのが特徴的でした。

後半のハイライトは金北山山頂直下の雪渓。見上げて一瞬ひるむような急登です。すでに雪は緩んでおり、ロープを伝いながらアイゼンなしで全員無事登り切ることができました。

入会して1年の筆者のような初心者にとって、残雪期の道はルート・ファインディングをはじめ慣れないものですが、いわば「箱庭」的に山登りの醍醐味が詰まった春

の大佐渡では、楽しみながら様々な経験ができました。このたび初めて登山計画書を書き、主催者側の視点で考え、行動する機会を得ました。従来の負んぶに抱つこの山行は卒業です。今後の山行を通じて、リーダーに配慮ができる(つまり余裕がある、それが難しい)、自分なりの貢献ができる独立した登山者を目指したいと思いました。

日本山岳会に入って嬉しいのは、登山歴数十年のベテランの先輩方と交流させていただけることです。ユースクラブではより身近に、経験豊富で面倒見の良い先輩方と初心者仲間たち、それをつなぐ若手実力派の皆さんが集っており、頼もしく感じています。忙しいなかボランティアで活動を支えてくださるリーダーの皆さんには尊敬の一言です。組織のありがたみを感じつつ、一步一步山の世界を広げていきたいと思えます。

最後に、ハイシーズンの佐渡島は宿の確保が大変難しいそうです。快くワンゲル部一行を受け入れてくださった節田副会長と夫人のご厚意に感謝し、改めてこの場を借りて御礼申し上げます。(鈴木郁子)



真昼の星への旅

水越 武著



2015年3月
新潮社刊
A3変形判 144頁
定価 30000円+税

図書紹介

本書のタイトル『真昼の星への旅』は、「切り立った険しい山の岩壁には、一日中、日差しが巡ってこない所がある」。そんな場所では「真昼でも星が見られる」という、かつて水越が伝え聞いた話をもととなっている。

眼に見えなくても確かに存在しているものがある。孤独と闘いながら、自分だけの何かを掴もうと極寒の山中を彷徨い続けた日々が重なる。

「白い風 日本アルプス」、「天空への道 ヒマラヤの氷河」、「極地の山 パタゴニアとアラスカ」、「水の華 雪と氷の造形」、「いのちの聖域 原生林」という5つのテーマが、この本の中で太い幹(章)を形成している。その間を分け入っていくうちに、自然に対する感受性が研ぎ澄まされ、喜び、驚き、寂しさなど、水越の想いがひしひし

と伝わってくる。
本書の中で大きな共感を覚えたのは、「雪」への憧れ、愛着の念である。著者と同じく、雪のほとんど降らない地で育ったためか、私も大いなる神秘を感じる。二十余年の信州での生活を経たいまでは、雪が全くない季節は寂しさを感じるのである。

この雪への憧れは、わび、さびに見るように朽ち果てていくものへの同調、朽ちては再生するプロセスそのものへの馴染みなど、古来よりの日本人が抱き続けている美意識が基調になっているとも考えられる。

水が蒸気になり、空気中で凍り、結晶(雪)となって辺り一面を真っ白く覆う。色彩に溢れた世界も、魔法をかけられたかのように、無彩色の世界に一変する。この魔法が、より北へ、より高山へと向かわせるのだ、と水越は語る。すべての生命体にとって不可欠な水は、気体、液体、固体と、色や形を変えている。摩訶不思議で、この上なく美しい物質である。

我々は日々、カラー映像の渦の中で生活している。映像や音声の世界の技術革新はめざましく、白

本書は、自然写真家・水越武の半世紀に及ぶ撮影影の集大成となる写真集である。序文、あとがき、各章の文章から、一人のナチュラルリストがたどってきた、その長く険しい道のりを知ることができる。1980年代半ばから第一線で活躍し続けている著者のライフワークは、自然界の摂理や地球規模の生態系をマクロ的な視点から捉えようという壮大なものである。日本列島を南へ北へ何度も行き来し、さらには海を渡って地の果てまで、まだ見ぬ風景を追い求め続けた半生。

寄付金及び助成金などの受入報告 平成27年4月まで

寄付者など	金額(円)	寄付の目的、その他
会員20名、 会友2名	17万4840円	北海道支部 50周年記念事業 募金 及び自然児学校
北海道知事	40万6000円	高山植物盗掘防止パトロール事業
公益社団法人 国土緑化推進機構	60万円	日本ラオス友好の森展示林造成事業
山田英暉氏	1万円	非会員より YouthClub への寄付
近藤孝 会員	2万2400円	図書交換会へ売上を寄付
青柳 かおる 会員	2万2700円	図書交換会へ売上を寄付
吉田俊介氏	50万円	前学生部委員長、 故吉田周平君のご尊父よりのご寄付

黒からカラーへ、静止画から動画へ、アナログからデジタルへと、大きく様変わりした。人はより簡便に、新しい技術を入手し活用できるようにになった。また、インターネットによるIT(情報技術)革新

が、様々な分野のプロ・アマの垣根を曖昧にした。写真界においても然りである。撮影機材は飛躍的に進歩し、驚くべき自動化が遂げられ、写真家の関与できる余地を奪った。フリーの自然写真家という立場で、高いレベルの活動を続けていくことは、誠に困難なことで、強い意志と並外れた忍耐力が必要である。

激変する文明社会のなかで、本書所載の99点の作品が、膨大な時間と想像を絶する労苦の末の産物であることは、誰の目にも明らかであろう。1点1点厳選し、細心の注意を払いながら完成したオリジナルプリントを原稿としたモノクロームの作品群。色彩の最も純化した色である「白」と、あらゆる色彩が含まれる究極の色である「黒」のみの世界。しかし、この2つの色の広がりには実は無限である。眼に見えぬもの、例えば、雪の冷たさ、岩の重み、霧の幽玄、神秘

性の表現、感動、心酔したものの表現、余白による山の高度感、傾斜性の表現は、モノクロームの世界に勝るものはない。それは水墨画がすでに証明済みである。

海外でもすでに高い評価を得ている水越。本書は500部の限定ではあるが、すべてのテキストに英訳が併記されている。師・田淵行男がこの世を去ってからすでに四半世紀が経過したが、水越はいまなお師と対話し続けている。全編モノクロームで挑む氏の行動は、写真家として反骨精神の表象のように思える。すべての作品が、白黒、中諧調の濃淡の配置が(絶妙)で、格調高く、美しい。

国内外からどのような反応で迎えられるのか、とても楽しみである。(財津達弥)

山の文芸誌「アルプ」と 串田孫一

中村 誠著



2014年11月
青弓社刊 320頁
四定価 3000円+税

山の文芸誌『アルプ』が300号

をもって終刊の幕を自ら引いて、早32年の長い年月が経ついま、このような新しい本が登場すること自体に静かな驚きを思う。

終刊以降、『アルプ』は折々に語られてきたが、その多くは全体像を捉え切れないある種のもどかしさを抱えていた。

串田孫一は広く知られるように哲学・文学・詩・博物学・絵画・登山などなど、実に稀なほどの多面的才能を持った人物であり、その彼が中心に在った『アルプ』の全体像を理解、表現することが、いかに難しいことであるかは容易に想像できよう。

本書は著者の専門である文学・詩という方向から串田と『アルプ』を論述したものである。

第1章こそ、幼少時の登山との出会いや、長じてのカタズミ岩登攀や鳥甲山登山など(山を登る)串田に触れているが、第2章からは(山を書く)串田が登場する以前の文学者、詩人としての串田を詳細に迫っている。

登山の方面から『アルプ』や串田孫一に親しみを覚えた読者の多くは、各自が思い描く『アルプ』とは異なる世界の記述に、読み進むべ

ースが掴み辛いかもしれないが、ここは先を急がずに、本書の半分を占める串田の文学・詩世界をゆつくり読むことを勧める。長い頁にわたる詳述の中で、串田の初期の詩集と『歷程』誌の關係や、1930年代の(山岳文学論争)などが語られて、詩誌『アルビレオ』や東京外山岳部OBの同人誌『まいんべるく』が、『アルプ』誕生への前奏曲になっていったことなどがよく理解できる。

本書後半は『アルプ』の中心にいた詩人たち、尾崎喜八、鳥見迅彦、辻まことの3人について、これも詳細に語られている。

終章『アルプ』以後とこれからで、登山用具メーカーのカタログかと思ふ見紛うばかりの昨今のカラフルな山岳諸雑誌の中で、(山を書く)ことに主体を置く『山の本』について、『アルプ』を継ぐものとして期待とともに語っている。

判型や文章主体の体裁など外形からの印象は『アルプ』に近いものがあるが、戦前からの『山』や『ケルン』、そして『アルプ』への系譜につながる存在としての捉え方は、いかがだろうか。

筆者も『山の本』は創刊号から

親しんでいるが、時に(形而上的な山)が載るうとも、雑誌としての佇まいや、頁を吹き抜けている風が随分と違っているように思う。

最後に些細なひと言。本書には葉ひもが付けられていない。読み応えのあるこの本を一気に読了する人はおそらくいまい。手元の紙片を挟んで読み続けば用は足りるかもしれないが、読書の風景としてそれは違う。これだけの著作に對する、後わずかの心配りがあつたらと思う。本作りも、神は細部に宿ってくれる。(小泉弘)

池田常道著

『現代ヒマラヤ登攀史 8000メートル峰の歴史と未来』



2015年3月 山と溪谷社刊
新書判 288頁
定価 880円+税

「机上登山という言葉がある。西洋ではアーム・チェア・マウンテン・アライニング(安楽椅子の登山)という。地図と登山記によって、居ながらにして山登りを楽しむ法である」とは、深田久弥さんの随筆「藤椅子の上の登山」の一節で、私

も長く炬燵の上でのヒマラヤ登山を楽しんできた。私が山登りを始めた1950年とは、ちょうどフランス隊がアンナプルナーI峰の初登頂をなしとげた年でもあった。ヒマラヤ8000m峰14座が次々に陥落していく黄金時代の幕開けであり、それに応じて数多くのヒマラヤ本が出版されるようになった。

そうした中で岩波新書の1冊、深田さんの『ヒマラヤ登攀史』(69年版)を、この池田常道さんの『現代ヒマラヤ登攀史』の紹介の前に、まず勧めておきたい。なぜなら、これら2冊は相俟つてこそ――。古い本ながら、ネットで探せば簡単に手に入るはずだ。

その上での本書のこと。私は正に「巻を措く能わず」。黄金時代以後、すなわち鉄の時代のバリエーション・ルートによる壮絶な登攀の数々を丁寧に教えられながら興味津々で読んだ。ほんの数行でありながら、それはそうだったのかと過去の知識の穴埋めに合点する箇所も少なくなかった。さらには1932年、ドイツ隊のナンガ・パルバット登山の帰り、1人の隊員が立ち寄ったピラミッド見物の

図書受入報告(2015年4月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
清水昭博	トゥール・デュ・モンブランを歩こう:素敵な山小屋とすばらしい展望	232p/21cm	本の泉社	2015	出版社寄贈
釘持忠夫	世界の山を描く:55歳から山へ登り絵を描く	104p/23cm	白山書房	2015	出版社寄贈
菊地敏之(編著)	日本の岩場(新版)クライミング・ガイド・ブックス(上巻)	159p/21cm	白山書房	2015	出版社寄贈
JAC四国支部(編著)	四国沢紀行:源流で見た夢 43本の写文集	92p/26cm	日本山岳会四国支部	2015	発行者寄贈
八嶋寛	防災アウトドア術:一人、一人がやれること。	106p/30cm	東北アウトドア情報センター	2015	発行者寄贈
水越武	真昼の星への旅(写真集):Journey to the Midday Stars	144p/31cm	新潮社	2015	著者寄贈
平尾剛	玄奘(三蔵)法師やマルコポーロも辿ったワハーン回廊	153p/30cm	霞ヶ関出版	2015	著者寄贈
新ハイキング社(編)	さあ、ハイキング!:首都圏で緑求めて(新ハイキング選書 No.34)	260p/21cm	新ハイキング社	2015	出版社寄贈
鈴木正崇	山岳信仰:日本文化の根底を探る(中公新書 No.2310)	306p/18cm	中央公論新社	2015	著者寄贈

折に墜死したのを「彼もまた、この山の不幸な犠牲者の列に加えるべきか」と受けるなどは、この著者ならではの記述であろう。私はすっかり嬉しくなりました。

本会の会員ならば、ぜひ本書を一読されたい。高尾山口への車中、本書に没頭する登山姿の高齢女性をお見受けすれば、私は大いに尊敬する。林六無齋先生の言には「隅田川の水はテムズ川にも続いている」。高尾山からでもヒマラヤに続いているだろう。

それにしても、実によく人が死んでいる。山そのものでなくても、2013年、ナンガ・パルバットのベースキャンプで登山者など11人がタリバンに殺された事件や前記ピラミッドでの墜死などを含めて、本文をざっと数えただけでも300人ほどの死が語られている。縁なき衆生には「やらなくてもよい所業」だろうが、一体、山登りとはなんだろうかと、私は改めて考えた。

(横山厚夫)



**平成27年度第1回(4月度)理事会
議事録**

日時 平成27年4月8日(水)19時00分～20時45分

場所 日本山岳会集会所

【出席者】 森会長、節田・黒川・古

野各副会長、高原・吉川・

佐藤各常務理事、勝山・山

田・野口・大槻・落合・川

瀬・山賀・直江各理事、吉

永監事(注：山田理事は所用のため審議事項は欠席)

【審議事項】

1・次期(平成27年度～28年度)人事(監事)について

次の監事候補者について審議した。なお1名については次回理事会で審議することとした。(賛成

14名、反対なしで承認)
《監事候補者》《新任》平井拓雄(7292)

2・神奈川大学タサルツエ遠征隊への名義後援申請について

神奈川大学から、大学創立100周年事業「神奈川大学タサルツエ遠征隊」の名義後援の許可申請があり審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

3・入会希望者承認について
47名の入会及び3名の復活入会

について、別添資料により審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・平成27年度通常総会について
(高原)

平成27年度通常総会の開催通知、出欠票・委任状・議決権行使書等について別添資料により協議した。
2・平成27年度第1回評議員懇談会の開催について(森)

平成27年度第1回評議員懇談会を5月12日に開催することについて協議した。

【報告事項】

1・平成27年度上高地山岳研究所管理員として元川里美氏、管理補

助として元川嘉治氏の両氏の雇用契約について別添資料により報告があった。(森、大槻)

2・(株)プラネットライツから2013年5月号「時空旅人・日本山岳史」で使用した画像を、同誌の再版で使いたいとの申請があり許可した。(節田)

3・関西支部から「日本山岳会関西支部八十年史」への「山岳」記事の転載申請があり許可した。(節田)

4・110周年記念事業委員会から、別添資料により各プロジェクトの進行状況等について報告があった。(黒川)

5・会員増強・財政基盤検討PTから、別添資料により検討状況等について報告があった。(黒川)

6・寄付金受入れ等について寄付金の事前申請1件、受入9件について、別添資料により報告があった。(吉川)

7・3月27日～28日に開催された「全国「山の日」フォーラム」の開催状況について報告があった。(森、山賀)

8・株式会社タベイ企画から借り受けていたエベレスト日本女子登山隊の装備品を返還するに際し、

INFORMATION

創立百十周年記念事業 日本三百名山登頂シリーズ②

志賀高原・笠ヶ岳、横手山と岩菅山、白砂山2泊3日参加者募集!

「日本三百名山登頂シリーズ」という山行企画第2回のご案内です。

JAC会員以外の方も参加できますので、山仲間やご家族などお誘い合わせの上、奮ってご参加ください。本企画の特徴は、*日本山岳ガイド協会のガイド資格を有するツアーリーダーが2名(最少催行人数15名の場合)同行します。
*インタープリター(解説員)として当該山域に精通しているJAC支部会員(第2回の場合は信濃支部)が、また、サポーターとして本部集会委員会スタッフが1名同行します。

【第2回日程・行程など】

期間 7月25日(土)〜27日(月)

集合時間 新宿駅西口スバルビル

前7時(マイクバス利用)

行程 1日目/新宿⇨笠ヶ岳峠⇨

笠ヶ岳⇨笠ヶ岳峠 徒歩約1時

間⇨のぞき⇨(スカイレーター・

リフト)⇨横手山⇨渋峠 徒歩

約30分⇨志賀高原 2日目/志

賀高原⇨高天ヶ原⇨寺子屋山⇨

岩菅山⇨聖平の上 徒歩約7時

間⇨草津温泉 3日目/草津温

泉⇨野反湖⇨堂平山⇨白砂山⇨

八間山⇨野反湖 徒歩約7時間

⇨新宿21時解散予定

食事 朝2回、昼2回、夕2回(1

日目の昼食は各自、行動食をご

持参ください)

宿泊 1泊目/志賀高原・暮岩温

泉「ホテル志賀サンバレー」2泊

目/草津温泉「琵琶の宿高松(ホ

テル高松)」

参加費 5万9800円

定員 20名(最少催行人数15名)

申込み・問合せ 〒105-0000

3東京都港区西新橋2-8-11

第7東洋海事ビル4Fアルパイ

ンツアーサービス(株)

TEL 03-35503-0223

FAX 03-35508-2529

日本三百名山登頂シリーズ係まで。

担当⇨椋山(すぎやま)、児玉

✉info@alpine-tour.com

同社との間で別添覚書を締結したことについて報告があった。(節田、勝山)

9・「日本山岳レスキュー協議会」への入会について、遭難対策委員会で見送る旨の報告があった。(黒川、川瀬)

10・上高地山岳研究所利用要領について、団体での申込みのキャンセル等対策を考慮、また、文言等を分かりやすく整理したとの報告があった。(森、大槻)

11・遭難対策委員会から、2014年10月以降の支部・委員会別の登山計画書提出状況について、別添資料により報告があった。(黒川、川瀬)

12・JAN110周年記念号(Vol.16)の概要について、別添資料により報告があった。(節田)

13・平成27年度の『山』編集業務を柏澄子氏、原邦三氏に、『山岳』編集業務の一部を原邦三氏に委嘱することについて、別添資料により報告があった。

14・海外委員会から、海外から着信するメールへの対応方法について、別添フローチャートにより報告があった。(黒川、川瀬)

会費の預金口座振替ご利用のお願い

日本山岳会では、従来の郵便振替による会費納入制度に加えて、会費の預金口座振替制度を導入しております。

すでに預金口座振替をご利用の会員につきましては、本年度(平成27年度)の年会費を4月27日にご指定の預金口座から引落しさせていただいておりますので、ご確認ください。

預金口座振替制度の導入は、会員の皆様が金融機関の窓口まで出向いて振込を依頼しなくて済むこと、あるいは払込の失念により未納となってしまうことを防止できるなど、会員の皆様の利便性の向上と同時に、本部における会費収納関係事務の簡素化を目的としているものです。

ご利用いただけない会員の皆様にも、ぜひともご理解の上、来年度(平成28年度)以降、預金口座振替制度をご利用いただきますようお願い申し上げます。

「預金口座振替依頼書」及び返信用封筒については、昨年6月の総会案内に同封して、会員の皆様に差し上げております。もし紛失された場合には、本部事務局に備え置いているほか、各支部事務担当者にお送りしておりますので、本部事務局または支部事務担当者にお申し出ください。

○ご不明な点は本部事務局(03-3261-4433)までお問い合わせください

15・委員会業務等で使用したいとの要望に応え、ハンド拡声機を購入するとの報告があった。(高原、吉川)

16・年会費の預金口座振替を促進するため、未利用の会員を対象に、利用願い書を今年度会費請求書に同封するとの報告があった。(佐藤、吉川)

17・自然保護委員会から、2015年度自然保護全国集会を7月11日～12日に、東京都青梅市で開催する旨の報告があった。(佐藤、山田)

18・2014年度に入会を承認した者のうち、入会手続き未済者が10名いるとの報告があった。(高原)

19・2014年度に海外遠征を行った、学生部女子ムスタン登山隊、東京農業大学ムスタングアタ登山隊の隊員が、それぞれの所属大学から表彰を受けたとの報告があった。(古野)

20・YOUTH CLUBから、本年度も4月下旬から5月中旬にかけて、春山天気予報を配信するとの報告があった。(古野)

21・『山』4月号の発行について報告があった。(節田)

【連絡事項】

1・群馬県知事からの谷川岳危険地区の登山禁止について

2・国立登山研修所からの平成27年度安全登山普及指導者中央研修会案内等について

3・『安全登山ハンドブック(2015)』の配布について

4・NPO法人富士山測候所を活用する会からの第10回通常総会及び特別講演会のご案内について

【今後の予定】

1・第3回小島烏水祭・全国支部懇談会(四国支部) 4月11日(土)～12日(日)

2・平成27年度第1回評議員懇談会 5月12日(火)

3・平成27年度監事監査 5月13日(水)

4・平成27年度通常総会 6月20日(土)

ルーム誌 4月

1日 常務理事会 集会委員会
YOUTH CLUB

22日	自然保護委員会 麗山会 みちのり山の会 フォト 緑爽会
21日	デジタルメディア委員会 資料映像委員会 110 周年記念事業実行PT(三 百名山) スキークラブ
20日	会 スケッチクラブ
18日	山の自然学研究会 総務委員会 資料映像委員
17日	資料映像委員会 「山の日」 事業委員会 高尾の森づ くりの会 01会
16日	閑談会
15日	青年部 三水会 つくも会 科学委員会 休山会 有志
14日	山岳研究所運営委員会 Y O U T H C L U B
13日	スキークラブ
10日	九五会 ラブ 緑爽会 休山会
9日	資料映像委員会 フォトビ デオクラブ 山岳地理ク
8日	理事会 山想倶楽部
7日	図書委員会 スケッチクラ ブ
6日	総務委員会 高尾の森づく りの会
2日	自然保護委員会 バックカ ントリークラブ

23日 ビデオクラブ
学生部 公益法人運営委員
会 緑爽会 山遊会

24日 総務委員会

27日 自然保護委員会 YOUT
H CLUB 高尾の森

づくりの会

28日 デジタルメディア委員会

30日 二火会

4月来室者 502名

会員異動(4月分)

物故

植田惇慈(10384) 15・4・7

樽木正保(11583) 15・4・16

大島 忍(13078) 15・4・12

中井祥雅(14316) 14・10・28

退会

福田 実(8993)

和波久基(11493)

浜 茂(12787)

坂本 豊(13850) 広島

大野 博(14664) 広島

内藤千代(14708) 石川

中津龍男(14738) 広島

内田八重子(15015) 東海



◆上高地フラワートレッキング
(2015)

山の自然学研究会

花の溪、上高地を春の花を訪ねて歩きます。

日時 集合 6月17日(水)9時

集合場所 上高地ビジターセンター

1前の広場(日本山岳会の表示をします)

解散 河童橋周辺 15時ごろを予定

行程 徳沢周辺まで

参加費 500円〔資料代、保険料〕当日いただきます。

参加資格 半年以内に15km以上歩いたことがある人

申込み メールで

(☒skblaw@yahoo.co.jp 大船武彦 まで)

募集 先着15人(なお、山岳会以外

の参加者もあります)

小雨実施。荒天の場合(予報を含めて)は中止しますが、前日までに

インフォメーション

お申込みいただいたアドレス宛に、ご連絡します。

◆2015探索山行のご案内
科学委員会

科学委員会

中央構造線、糸魚川静岡構造線の大断層地帯と入笠山を訪ねます。我が国最大級の断層地帯を諏訪湖付近から大鹿村まで露頭や地形を巡検し、リニア新幹線関連地域も訪れる予定です。2日目には構造線上に位置する入笠山を登山します。往復チャーターバス利用、小渋温泉・赤石荘(大鹿村)に宿泊。

日時 6月13日(土)~14日(日)

参加費(予定) 2万円(バス、宿泊ほか)

日程 (予定) 13日||新宿駅西口

出発<分杭峠<大鹿村中

央構造線博物館(学芸員の案内で村内の地形を巡検します)~赤石荘 14日||赤石荘発<大鹿村村内巡

検<入笠山頂<湿原などを散策<登山口発<新宿帰着

※詳細は別途ご案内予定

申込み・問合せ先 (公社)日本

山岳会科学委員会 ☒kagakun@

jac.or.jp

◆八幡平と裏岩手縦走

集委会

みちのくの秘湯、松川、藤七という2つの温泉に泊まり、花々の咲き乱れる静かな八幡平と裏岩手の縦走路を歩きます。

協力 岩手支部

日程 7月10日(金)~12日(日) 2泊

3日

集合 10日9時30分 JR東北新

幹線盛岡駅

解散 12日 12時ごろ 盛岡駅

行程 10日八幡平周辺 11日松川

温泉<大深岳<藤七温泉

費用 3万2000円(宿泊2泊、

懇親会、現地交通費、保険

料、雑費)

申込み 6月20日までに長島泰博

宛

FAX 046-841-15476

または ☒syukai@jac.or.jp

※申込み者に詳細をお送りします。

保険加入のため、生年月日をお知らせください。

◆「夏山フェスタ」を今年も開催
日本山岳会110周年記念フォーラムも

一昨年から始まった「夏山フェスタ」が我が東海支部の全面的バックアップを受け今年も開催されます。

登山愛好家が増えていることに

加え、国民の祝日「山の日」が8月11日に決定、2016年から施行されることになったこともあり、

昨年は6600人という大勢の来場者を数えました。若年層から中高年まで幅広い登山愛好家に、山の恵みや安全登山などについて考えてもらうことを目的に開催されます。特に今回は、日本山岳会1

10周年記念フォーラムとして、昨年9月の御嶽山の噴火や火山をテーマとしたフォーラムも予定されています。

その他予定されているフォーラム、講演会、セミナーやイベントなどは下記のとおり。

①フォーラム「山の日」制定記念として「家族登山」「親子登山」をテーマとしたフォーラム(鈴木英

敬三重県知事ほかを予定)

②トークショー「8000m峰全

14座完全登頂した竹内洋岳さんとイラストレーターの鈴木みきさんの対談

③山に関する各種セミナー…安全登山、高山植物、山の天気、山岳写真の撮り方、登山用品の使い方など

④山小屋・山岳関連団体・自治体関係者による相談コーナー

⑤ブースでの登山用品の新商品PR・展示・販売

⑥展示等…山岳写真展、ロングトレイル・コーナー、山によろず相談コーナー(東海支部担当)など皆様お誘い合わせの上お出かけください。

日時 6月20日(土)午前10時～午後6時30分 6月21日(日)午前9時～午後5時
会場 名古屋駅前「ウインクあいち」(愛知県産業労働センター)7階及び8階

主催 夏山フェスタ実行委員会
特別協力 (公社)日本山岳会東海支部ほか
入場 無料

*詳細は検索エンジンで「夏山フェスタ」と入力して検索してください。

◆巡回写真展のお知らせ

26年度「アルパインフォトビデオクラブ」の作品約40点を、次の支部地区主催にて巡回展示します。

●山形支部地区「心に映る山々」展
会期 8月15日(土)～22日(土)
場所 山形県酒田市総合文化センター

問合せ 山形支部・志田郁夫
TEL 023-433-6182

●信濃支部地区「心に映る山々」展
会期 9月1日(火)～26日(土)
場所 長野市大門町「柏与フォトサロン大門」(柏与文具サロン2階)

問合せ 柏与フォトサロン大門
TEL 026-232-7609

27年度「アルパインフォトビデオクラブ」の作品約40点を展示します。(40点のうち選抜作品14～15点のみ)

●第23回山岳写真「心に映る山々」展
会期 11月12日(木)～18日(水)
場所 ポートレートギャラリー
問合せ 夏原寿一
TEL 03-3710-5059

◆中村光吉展
「輝く富士」「古代遺跡」「山」の油彩画と写真です。

会場 長野県茅野市(JR茅野駅直結)茅野市民館・市民ギャラリー

TEL 0266-82-8222
会期 6月10日から6月18日
休館日 16日(火)

時間 10時～18時30分
問合せ TEL 090-5339-6238 (中村)

◆海外委員会
東チベットへの探検を継続、英

国王立地理学会はじめ各国山岳会より受賞、そして各国語による著作にて山城の紹介を重ねる、中村保氏による講演。

日時 6月6日(土)14～16時
場所 日本山岳会ルーム
出席 講演500円 懇親500円(学生無料)

定員 40名 先着順(広く会員外も可能)
申込み iki.japanik@yahoo.co.jp
海外委員会・チベット勉強会・田口憲司

◆編集後記
●ネパール大地震で亡くなった方々のご冥福をお祈りし、被災された方々に心からお見舞い申し上げ

げます。巻頭ページにある支援のきっかけは、4月27日に予定されていた駐日ネパール大使による、田部井淳子さんのエベレスト登頂40周年記念祝賀会にあった。祝席を辞した田部井さんに対し、大使が今こそネパールを愛する人たちに集まってほしいと呼びかけ、支援の方向性が決まった。

●ランタン谷を襲った雪崩と土石流はすさまじい。大阪市立大隊は、当時ランタンのBCにいた。へりで脱出したときの映像を見せてもらい、言葉を見失った。生きる場を失った人々は、悲しむ間もなく次の一步を踏み出さなければならぬ。他の地域も同様だ。復興という言葉ではなく、ゼロ、いやマイナスから立ち上がっての再生だ。彼らが生きる道を見出せるよう協力したい。(柏澄子)

日本山岳会会報 山 840号
2015年(平成27年)5月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 森 武昭
編集人 柏 澄子
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社